

平岡いきものはっけん隊から
お届けする地域の自然情報誌

うんこを食べる美麗種
オオセンチコガネ
(厚木市下荻野にて)



季刊 湘南自然誌

2019年 春の記録号 通巻13号

Vol.13

Shonan Nature Magazine
2019 Spring Report

Contents

- | | | |
|-----------------|--------------------------|-------------------|
| P1 ~ 平岡発 四季のたより | P3 ~ 特集「虫の命に向き合って」 | P21 特集2「あぶない生きもの」 |
| | P9 ~ はっけん隊 ACTION REPORT | P22 おえかきひろば |
| | P12 ~ みんなでつくる生きもの図鑑 | P23 はっけん隊 NEWS など |



「てんとうむし」
ともぞえ この (3才)

〈特集〉

虫の命に向き合って

たてのひろし
館野 鴻先生

絵本作家・生物画家



自然はみんなの

平岡発 四季

2019年3月~5月 春の「遊び」と「コラム」



シュレーゲルアオガエル

図鑑活動



これナナホシテントウじゃない?

やったー! 図鑑に印をつけよう!



あっ! いたよ~!

オニヤンマの幼虫を探しながら小川を補修



さっき見つけたのこれかな?

みんな大好き! 職員室の昆虫ポスター



くさい~(笑)

色々な葉の匂いを嗅いでみよう!

あれ?

いい匂い~!

ドクダミ・クサギ・ヤブニッケイなど

身近な自然の中でたくさんの発見をして楽しもう!

平岡幼稚園は県内の私立幼稚園として最大規模の7,501㎡の面積を有し、その敷地は可能な限り地域の生き物が住める空間(ビオトープ)として管理しています。2009年に園内をビオトープにして以降、園内では様々な動植物が集まるようになり、園児や教職員で見つけた生物の累計は、400種類を超えました。この生き物溢れる園地で、子どもたちは毎日の園生活を過ごすこととなります。

自然は、たくさんの不思議で溢れています。その美しさに感動したり、思いもよらないことに驚嘆したり、さまざまな命と関わっていくことは、人の心を豊か育ててくれるものです。また自然は、科学の発達した現代においても未だ解明されていない多くの謎で包まれており、子どもたちの溢れ出る興味・関心を満たし続けられる無限の可能性を秘めています。このような自然の奥深さの度合いは、自然の豊かさに比例します。子どもたちが豊かな自然環境の中で、たくさんの学びある発見を重ね、心身ともに大きく成長していけるように、私たち大人は、身近な自然環境の大切さを認識していく必要があると思います。



拡大するとトゲがカギ状に

なんでくっつくの? おもしろーい!!

くっつく実

カナメグサの実



これ何に食べられるの!?

ヨモギ団子づくり

おいしい~♡

ヨモギっていい香り!

本誌への写真投稿お待ちしております。



ニホンカワトンボ♂

協議会による主な啓発活動

- ・ひらつか環境フェア 2019
パネル展示期間(平塚市役所にて)
7月14日(日)~18日(木)
10:00~16:00
- ・第11回 Think Eco ひらつか 2019
(横浜ゴム 平塚製造所にて)
11月9日(土)

みんなの発見を地域の環境の保全に!

平岡幼稚園では、園内だけでなく、市内のさまざまな自然に目を向け、各環境の特色を活かした教育を行っております。このような地域に根差した活動実績から、平塚市が2021年度の策定を目指す「平塚市生物多様性行動計画(生物多様性地域戦略)」のための基礎資料作り等を行うことを目的とする行政提案型共同事業「平塚生物多様性推進協議会」の発足準備に、平成30年度から我が園が参加・協力して参りました。

この協議会は、2019年4月より2021年3月までの3年間、市内の重要スポットの生物調査を行うと同時に、市民の皆さんを対象とした啓発活動(左欄参照)を行います。調査活動は、一程度の専門的な知識が必要ため、園児の皆さんで協力して...とはなかなかいかないのですが、皆さんから送っていただいた生物情報(写真)も場合によっては含めることができます。みんなの故郷・生活圏である市内でのたくさんの生物の発見を、地域の自然環境の保全に活かしていきたいと思っております。

ワンダーランド！

※本ページは「園だより」2019年4月～6月号に掲載した文章を、改編して紹介しています。

ニホンアカガエル

のたより

文：堀田 佳之介 絵：富岡 誠一



多様な生活史、命の重み

先日、園児のお母さまより「相模原のキャンプ場であちらこちらにたくさんいた虫です。これはコブハサミムシでしょうか？」との発見メールが届きました。茅ヶ崎野外自然史博物館の岸一弘先生に確認して、クギヌキハサミムシ科（コブハサミムシもこの仲間です）の幼虫であることがわかりました。このコブハサミムシは、孵化して最初の餌が「母虫」という衝撃的な生態を持っていることが知られています。なぜコブハサミムシの幼虫は、母虫を食べてしまうのでしょうか。



クギヌキハサミムシ科の幼虫 (コブハサミムシ?)

コブハサミムシは、山間部の沢沿いを繁殖環境とすることで命を繋いできた種です。母虫は、真冬に産卵し、春先まで卵を守ります（父虫は冬を越さずに死んでしまうようです）。卵が孵化する春先は、まだ気温が低く幼虫の餌の確保が難しい時期なので、幼虫は母虫を食べることで命を繋ぐ第一歩を踏み出します。そして、繁殖場所である沢の増水が多くなる梅雨までに成虫になり、台風や秋雨の時期が終わる10月中旬ごろまで沢沿いから離れるという生態を獲得したと考えられています。

生き物は、時に私たち人間の常識や価値観では考えられないような生活史を持っています。コブハサミムシは、母虫を食べることで種の存続を可能にしています。言い換えれば、母が死ななければ、子は生きられないのです。生き物が持つ多様な“生態（生き方）”を知ることは、人の心の奥底を揺り動かし、“生きること”や“命”、“死”について考えを深める一場面になることなのでしょう。コブハサミムシは園内では出会うことはできませんが、人の心を育むタネが自然界にはたくさんあることを改めて感じました。

身近な環境にも、子どもたちの心を揺れ動かすような“命”や“死”の場面があります。



ナガコガネグモに捕食されるクサキリ



ニホンカナヘビに捕まったセスジツユムシ



モモズメ幼虫の死体に群がるアリ類

オツネントンボ♂



オツネントンボ♀

珍しいトンボ（オツネントンボ）を発見！

平岡幼稚園は、周りを農地や住宅に囲まれ、豊かな自然に恵まれた立地ではないのですが、それでも2009年にビオトープ（生きもののすみか）を作って以降、多くの生きものが集まるようになりました。10年経った今でも、まだまだ新しい発見があります。去年（2018年）は、5月にミヤマカワトンボ成虫が市内で初確認されたほか、11月には県内で記録の少ないミナミアオカメムシも見つかりました。

今年に入っても発見は続いています。3月に平岡の森で見つかったオツネントンボ（越年蜻蛉）は、和名の通り成虫で越冬する珍しいトンボで、これまで湘南地域での報告例は僅か4例しかありません。そのオス・メス両方が同時期に園内で確認されたのです。園内で繁殖してくれればいいな～と、皆で温かく見守っています。

予想もつかないような発見を秘めた場所が、常に子どもたちの周りにあるということの大切さを感じています。 ※この記録は三浦半島昆虫研究会会報「かまくらちょう」に投稿中。

特集

たての ひろし

絵本作家 館野 鴻 先生

虫の命に 向き合って

インタビュー：平岡幼稚園園長 堀田佳之介

1級こども環境管理士、2級ビオトープ施工・計画管理士
神奈川昆虫談話会会員、ひらつか生物多様性推進協議会監事

2019.4/26、秦野市のアトリエにて

〈 館野 鴻 先生 Profile 〉

1968年横浜市生まれ。幼少時から細密画家熊田千佳慕氏に師事。学生時代は北海道で過ごし、演劇や舞踏、音楽に没頭。その後、舞台美術などの仕事をしながら、音楽活動と昆虫採集を続ける。秦野市に転居後、生物調査の傍ら生物画の仕事を始め、児童書や図鑑の生物画や解剖図などを手掛ける。2009年に絵本『しでむし』（偕成社）を上梓し絵本作家としてデビュー。2016年には『つちはんみょう』（偕成社）で小学館児童出版文化賞を受賞。他にも、『ぎふちょう』（偕成社、2009年）、『こまゆばち』絵（福音館書店、2012年）、『なつのはやしのいいにおい』（福音館書店、2014年）、『世界の美しき鳥の羽根』イラスト（誠文堂新光社、2015年）、『宮沢賢治の鳥』絵（岩崎書店、2017年）など多くの絵本やイラストを手掛けている。

堀田佳之介（以下、堀田）> 以前から館野さんの絵本を読んだり講演会にお伺いしていたのですが、いつかこの特集に出てくださいませんかと思っていました。それが実現して大変嬉しく思います。館野さんの絵本『しでむし』（ヨツボシモンシデムシの一生を追った絵本）は、昨年、園児や父母とライトトラップ観察会をやった時に、虫が集まって来るまでの間に朗読させていただいたんです。

館野 鴻（以下、館野）> そうですか。夕暮れ時、人の意識状態が変わるころに野外で朗読っていうのもまたいいですね。

堀田> はい。野外ということもあり、絵本の世界との距離が近まった感じで、独特の臨場感が出たような気がしました。今時の子どもたちは、はあまり自然の中で遊ぶ機会がなかったりしますし、命というものが概念的にしか理解されていないような気がするので、様々な生きものの命に触れてもらいつつ、生きものの生きざまを描かれている館野さんの絵本も使わせていただきました。

館野> いきなり「命」と言われてもピンと来ないでしょうね。子ども自身が体を使って体験してもらわないと、こっちがいくら言ったって分からないですよ。絵本を読む以前にある程度の実体験がないと、内容が子どもたちの体に入っていない。私も小学校に関わりがあって、子ども相手に観察会とかやっているんですけど、生きものの命を感じさせるために、虫を食わせてます（笑）。

虫を食べる

堀田> 館野さんの講演会で昆虫食の話をお聞きして衝撃を受けました（笑）。子どもたちにも食べさせてるんですか？

館野> いきなり食わせてはいませんか？（笑）。まずは虫を食う変なおじさんの姿をリアルに見せてやるんです。虫は全部子どもたちに捕って来てもらって食材

にする。子どもたちは「可哀想！ひどい！」とか言うんだけど、鍋で煮るとバッタは赤くなる、醤油とか垂らすと旨そうな香りがする、そして旨そうに食う。そうすると必ず「俺も食う！」って子どもが出てくるんで、校長先生に「食べさせていいですか？」って一言了承をもらって食べさせるんです。中には「また食べたい！」って観察会のリピーターになる子もいるんですよ（笑）。そうやって体験すると人間の認識なんてコロッと変わります。

堀田> 木の実を食べるくらいなら私も観察会でやっていますが、昆虫試食付き観察会は私には無理です（笑）。



ライトトラップ観察会で絵本『しでむし』の朗読

館野 > 私は仲間にはみんな食わせてますよ。田んぼやってた時は、手伝ってくれる人にザリガニ食べさせてましたし（笑）。あれは普通に旨いですから。田んぼの生きものでもタイコウチはすごく不味い。中華風の味付けで食べてみたけど食べたもんじゃない。けものみたいな味。ただ出汁にはいい気がしてます（笑）。東南アジア風の料理の出汁に使ったら逆に旨いかもしれない。オタマジャクシも食べたもんじゃないです。まだ食べたことはないのですが、タガメは旨いと聞いてます。

堀田 > 色々食べてますねえ（笑）。

館野 > 虫を食べ始めたころは楽しくて、集まったものは片っ端から食べてた。ただ、ガは美味しいっていう人もいるんだけど、私は好みではないですね。独特の粉っぽさと香りがちょっと苦手。カメムシは意外と旨い。香辛料のような感じ。

堀田 > 一番不味かったのは何ですか？

館野 > ガムシですね。この世にこんな不味いものがあるのかというほど不味い。でも吐き出したら負けの気がするので飲み込んだ。そしたら次の日お腹壊しましたよ（笑）。カブトムシとか甲虫の幼虫は大体不味い。朽木を食べてるやつは美味しいんですけど、土の中のはダメですね。土臭いというか変な匂いがする。キマワリとかゴミムシダマシの幼虫も不味い。ケミカル臭がする。「やっべ、これまた腹壊すな…」って思ったんだけど、大丈夫だった（笑）。薬のような味がすることは、逆に体にいいのかもしれないですね。

堀田 > セミは成虫は美味しくないんですか？

館野 > ダメですね。揚げてバリバリ食べるとまあまあ旨いんですけど。旨いのは羽化中の真っ白なもの。これは絶品です。

堀田 > セミは好きなんで一度は食べてみたいとは思ってますが…

館野 > セミは簡単に捕れるからいいですよ。それから、ミヤマカミキリの蛹。あれも旨かった。幼虫も旨いんだけど木屑食べてるんで若干口当たりが悪い。一方蛹は老廃物を全部出してるんで、口当たりがよくて旨い。ただ、昆虫は栄養価が高いし、食べすぎはよくないかも（笑）。

堀田 > イナゴが昔から佃煮なんかにされて食べられてきたことはよく知られていますね。



堀田 > 一番旨かったのは？

館野 > ハルゼミですね。幼虫を茹でたやつ。安曇野でハルゼミを見に行った時、羽化に失敗したやつを捕って食べましたよ。同行者には「何するんですか！館野さん悪魔ですね」なんて言われたけど、「アリに食われるよりいいだろ！」って食べた。ただ、宿にコンロがなくて電気ポットしかなかったから、茹でたんですよ。それまでセミの幼虫は素揚げにして食べてたんだけど、茹でるとさらに美味しいですね。嫌がってる人にもアスパラなんか添えて食べさせましたよ（笑）。初めて食う人は「悔しいけど旨い！」って言いますよ。ナッツ系の味です。トウモロコシのような甘さも感じますね。ただし、甲殻類アレルギーの人はダメですよ。堀田さんもハルゼミ食べてみてください。セミパーティーしましょう（笑）。

堀田 > ハルゼミは神奈川県では数が少ないですし…

館野 > それじゃあアブラゼミ食べましょう！セミの幼虫はどれも基本的に旨いんで。



館野 > イナゴは田んぼやってた頃よく食べましたね。無農薬でやってたから無農薬イナゴ。田んぼの作業しながらペットボトルに突っ込んでいってね。同じバッタでもコオロギとイナゴは全然味が違うんですよ。イナゴは米糠の香りがする。米糠だと思えば一層美味しく感じられる。コオロギは雑食性だから癖がない味で、これも旨いです。あとカマドウマも旨いらしいですよ。

堀田 > 昆虫ではありませんがクモなんかも食べたりしてるんですか？

館野 > クモは苦かったね（笑）。オニグモなんかのパンパンなお腹は肝臓が占めてるようですね。あれが多分苦いんでしょうね。

堀田 > 衝撃的なお話ですが、「食べてみる」というのは、虫も人も共に生態系の一部であると理解するいい方法かもしれませんね。

自分の目で確かめてみよう

堀田 > それでは本題の、館野さんの絵本のお話を伺いたいと思います。講演会でお話を聞いて、一冊の絵本の背景に物凄い量の調査・下調べがあるんだなと驚きました。

館野 > 私は絵本を描きたかっただけなので、そこまでやるつもりは全然なかったんだけど、一つの虫の生活をとことん観察していかないと物語が生まれてこないんですよ。自分の考えたストーリーに合わせて題材を選んでいくこともできるけど、それでは自分を出

しているだけになってしまう。一方で、「これ知らなかったでしょ？」って言いたいわけでもないから、観察して得られた知見を並べていくだけの本にもしたくない。ある虫の観察結果がどんどん自分の予想を裏切ってきて、虫がストーリーを導いていくのが理想ですね。

堀田 > 『つちはんみょう』は、なんと8年に渡って調査されて生まれた絵本だそうですね。

館野 > ヒメツチハンミョウのことを絵本にするにあたって、まずは文献で調べるわけですけど、「孵化した幼虫は花に登ってヒメハナバチに寄生する」って必ず書いてあるんです。でも誰も検証した人がいないんです。みんなファーブル昆虫記を鵜呑みにして書いてる。これは自分の足で調べてみなきゃなと思って観察を重ねてみたんです。花のある場所に孵化した幼虫を持って行って観察したり、いろいろやってみたけれど、一日中見ても上に登ってという行動は一切なかった。放射状に広がるばかりで。ならば直接ヒメハナバチの巣に行くのではないかと考えたけれども、実際はコハナバチの巣穴の入り口に集まることが分かった。まずは巣穴から出てきたコハナバチにつかまって花に運ばれて行きます。そうやって花までたどり着いて、今度は真の寄生先であるヒメハナバチが花に寄って来るのを待つんです。それでやっとヒメハナバチにつかまることができて、巣に運ばれて行き、そこでヒメハナバチが集めた花粉団子なんかを食べて育つということが分かった。

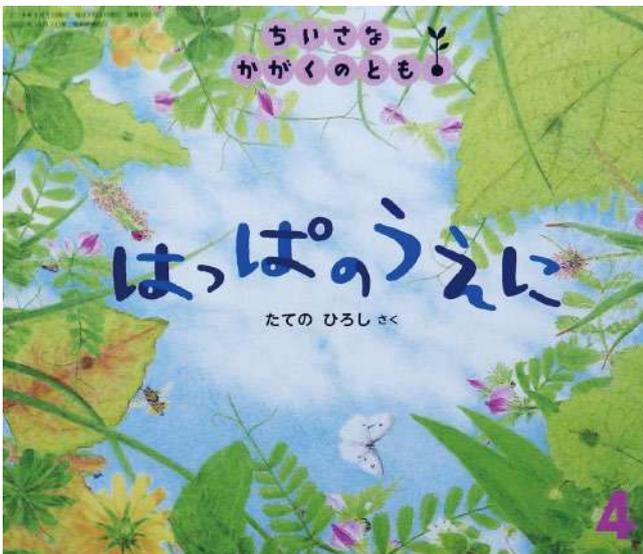
堀田 > 自分の目で見てみるのが大事なんですね。

館野 > ええ。絵本にする際にはある程度対象を類型化せざるを得ないんですけど、それでも生きものの行動に含みを持たせるために、捕食シーンそのものは描かずに寸止めにして表現したりと工夫しています。

読者に発見の喜びを

堀田 > 最新作『はっばのうえに』では、シテムシやツチハンミョウと違って、ナナホシテントウというぐつと身近な昆虫を取り上げられてますね。

館野 > シテムシとか一般的にはマイナーな虫を取り上げてきましたけど、「みんなこんな虫知らないでしょ？」



最新作となる絵本『はっばのうえに』(福音館書店)

館野 > そうですね。たとえばその名の通りマイマイカブリがカタツムリを食べることはよく知られていますが、捕食に失敗することはあまり知られていません。これは何度も実験したんですけど、カタツムリは食べられそうになるとブワーっと泡を出してマイマイカブリを泡まみれにして、カタツムリとは思えないスピードで逃げていくんです。生きものは凶鑑通りに生きてはいないんですよ。私の絵本だって鵜呑みにしちゃいけませんよ？あくまでも「私が」見たものに過ぎませんから。ヒメツチハンミョウの生態だって、本当はもっといろいろなパターンがあるのかもしれない。虫たちが本当はどのような生活をしているのか？一人一人が百万個の目を持っていて全部見ることでできません。自然のことを類型化して一つの説にまとめるなんて無理なんですよ。

堀田 > それを絵本にしようというのだから大変ですね。



『つちはんみょう』偕成社、2016年(小学館児童出版文化賞)

みたいなのも差別的な気がして、今度の本では逆に誰もが知っているテントウムシを題材にしました。みんながよく知っている生きものの中に、ハッとさせるものを感じさせたいと。そのためには情報としての答えを提示するだけではダメなんです。読者の疑問を膨らませるようにしなくては発見の喜びがなくなってしまいます。この本を読んだ後に、また新鮮な感覚でナナホシテントウに出会ってみたいですね。

堀田 > 子どもたちにも、ナナホシテントウでもモンシロチョウでもいいから、まずは身近な自然に触れて、自然を見る自分なりの基準を作って欲しいですね。

館野 > 『湘南自然誌』を読ませてもらいましたが、平岡幼稚園はとてもいい教育をされてると思いますよ。園長先生が園庭の虫を調べたりしてる姿を見て、園児たちも自然を知っていく作法を学んでいくんじゃないんですかね。本当は大自然と家の庭や園庭のような小自然を往復するとどちらも理解しやすいんですけど。ただ、今自然豊かな場所は立ち入り禁止になってることが多いですが、これは我々虫屋にも責任があるんです。勝手に分け入って好き勝手調査や採集をしてきたんですから。

開発と保全のはざままで葛藤

堀田 > 大自然とまではいきませんが平塚にも豊かな自然は残されていますから、平岡幼稚園では子ども

もたちと共に園外でも観察会を開いています。ただ、どうも行政には平塚の自然の豊かさが十分に認識されていないように思うんですよ。なので今、平塚の豊かな自然が未来の世代まで残されるように、官民協同の「ひらつか生物多様性推進協議会」という組織に我が園も加わって、平塚の自然環境を評価する調査を行い始めています。調査結果が、開発の際に参照される基礎資料になればいいなと思っているのですが。

館野 > 官民協同でやれるのであればいいですね。私もそういった活動には関わり続けてきたんですが、今では私は、山から低地へずうっと繋がる緑の回廊を維持できるのであれば、他はある程度何をやったっていいんじゃないか？と思ってるんです。

堀田 > 街づくりのための開発も必要だと。

館野 > ええ。街づくりは必要と思います。開発がなかったら経済面でもどうしようもなくなってしまいうし。私が住んでるこの家だってある意味開発の結果なわけです。大体、開発絶対反対！という立場は受け入れられにくいものです。開発された環境や風景も、そこで生まれ育った人にとっては大切な原風景ですので、それも大事にすべきではないですか？世の中にはいろんな立場があります。環境保全活動に携わっている人たちには必ずしもいい顔はされませんが、時には相手の立場に立って考えてみる必要があります。

堀田 > 館野さん自身保全に関わってきたからこそ出てくる言葉ですね。

ません。ただ、開発を全肯定するわけではなくて、開発と共に生きてきた僕らが「これはまずかったな…」って思うことがあるわけです。そこは少しでも元に戻すなり改善するなりして次世代に残していきたい。そのためには、「開発もいいけど、そこには過去からの長い目を見た巨視的なビジョンが欲しい」と、行政とじっくり話し合うことが大事だと思います。それからもう一つ、経験上、行政や市民に「生きものこんだけいますよ」って言ったってまず理解されないの、最近では「心象景観」という別の視点からのアプローチも必要じゃないかと思ってるんです。

「心象景観」という視点

堀田 > 心象景観？



昆虫食に環境保全、絵本のお話等々、多岐に渡る話題を4時間以上語っていただきました。

館野 > 保全活動にはそこそこ関わってきたし、今もできる範囲ではやっていますが、常に葛藤・矛盾を感じています。「自然を守りたい」って一言でいうけれども、どんな自然を守りたいかといったら、多くは、「クヌギやコナラが生えてて、草草があつて虫がたくさんいて」という里山のことなわけです。でもその里山は、勝手にそうになっているのではなくて、人間が森の木をぶった切つてそれを資源として利用して生まれた環境なわけです。ならばその作業を私もやるべきだと思つてやってきましたけれども、50過ぎてひとりでやると体もきつし、挫けました。水田も続けてきたけど辞めてしまった。イノシシや鹿、鳥やヒルに負けました…お米なんか種もみくらいしか残らなくて。昔はそうしなきゃ暮らしていけなかったという現実があつたわけだけれども、現代社会に生きる我々にはとてもじゃないけどやり通せ



人の手が入ることで維持される里山環境

館野 > 幼いころ走り回つた野山、窓から望むいつも変わらぬ山並み、そういった風景を心に蓄えながら人は人格を形成していくわけです。それがたとえば地主の意向で一遍にメガソーラーになってしまった時、その住民はいわば心に怪我を負うことになるんですよ。「地主なんだから何やったっていいじゃないか？」って言うのも当然ではあるけれども、一方でその景観と共に暮らしていた住民の心はズタズタになる。土地は誰かの私有地になっているけれども、景観はみんなが共有しているものなんです。私はそのあたりのことにももっと着目する必要があるのではないかと思っています。「ここにはオオムラサキがいるから保全しろ！」なんて言ったって、ほとんどの人にとってはどうでもいいことなわけです。でも景観は明らかにみんなの共有物ですから理解が得やすい。そういう視点からの保全も考えていくべきではないかと思っています。

堀田 > 生態系（生きもの）の保全と景観の保全は、重なる部分が多いですね。

館野 > 数百年変わらなかったものっていうのは、財産だと思うんですよ。それがここ数十年で一気になつてしまうというのは大きな損失ではないのか？生きもの情報を打ち出すよりも効果的かもしれません。この景観が平塚市の良さ、財産なんじゃない？っていうね。

堀田 > そういう視点は私は持っていませんでした。大変参考になります。

次回作は…

堀田〉次回作、今制作中の絵本もあるんですか？

館野〉今、ガロアムシを題材にして制作を進めています。地下のガロアムシの生活を追いながら、そこが開発によって一変してしまう様を描こうと思っています。開発していくのもある意味人間の自然な姿ではあるのだけれども、その一方で地下のガロアムシはあっという間にいなくなってしまう。普段無いことになってる生きものたちの世界と、私たちの生活を重層的にとらえられないか？それを今度の絵本の軸にしようかと考えています。ガロアムシと言いながら人のことも描こうと。

堀田〉普通に人間社会を生きてると、自然と人間の繋がりが見えなくなっていくますね。

館野〉大きな震災とか水害とかあったときに、ハッ！



ガロアムシの孵化～制作中の絵本の原画より

画像提供：吉田 譲氏

昆虫の古い形態を残していることから「生きた化石」と呼ばれることも。



主に地中で暮らす
ガロアムシ

館野〉ええ。他にも、小笠原諸島と外来種に脅かされる固有種アニジマイナゴを題材に絵本を描きませんか？っていう話もあるんです。私も外来種のことで何か書きたいというのはあったから、これもものにしたい。実際島に行ってみたんですけど、アニジマイナゴの問題を超えたことがそこではずっと起きています。私は感じた。小笠原には石器が出土したりしてる。ということは、人間も何度も流れ着いて、滅びては流れ着いてを繰り返して今がある。そういうことも含めた何かを描きたい。現時点の構想では、在来種を軒並み食っていくトカゲ「グリーンアノール」を主役してみようかと考えてます。細かいところを見ると激変しているような島も、一歩離れると海に浮かぶ大昔から変わらない緑の島。目の前の小さな事にとらわれていいとか悪いとか考えてると、視野が狭くなるのではないかと一歩離れて、少し長い目で見てみる。現状を少し許して、優しい目で解決策を探してみてもいいかな？



ガロアムシ調査風景

と自然の力に気付いたりしますよね？東北の大震災の時には多くの方が生死に向き合ったはずですが。私はそういった時に受けたインパクトを忘れないために絵本を描いているようなところもあるんです。半年に一遍くらいしか読みたくない絵本。読みたくないんだけどあった方がいい絵本。そういう力のある本を作りたい。

堀田〉私は、館野さんの絵本に、心が震えるような力強さを感じます。そういえば、玄関先に飼育箱がいっぱいありましたが、あれは？

館野〉オオセンチコガネ（表紙参照）の観察をしているんですよ。牛なんかの糞で玉を作って産卵するんですけど、その糞玉のシェアしてるかどうか？男女分業してるかどうか？が狙いどころ。社会性があるということになると面白い絵本が作れるかもしれない。後で中を見せてあげますよ。牛糞入りですけど（笑）。

堀田〉題材にする虫がたくさん控えているんですね。

また、グリーンアノールは現代の人の世界を写しているのではないだろうか？そんな本になるかなあ。私はただ情報を伝えるだけの科学絵本を描くつもりはないから、外来種問題を越えた普遍的なものをとらえて絵本にしていきたいんです。

作家になる転機

堀田〉館野さんはやはり子どものころから虫好きだったんですか？

館野〉たまにものすごくマニアックに虫のことに詳しくあったりする子がいますけど、私はそうではなかったですね。友達と「カブト取りに行こう！」って行くくらいのもので。本格的に虫にのめりこむきっかけは、中学一年生の時に友達に「生物部辞めて陸上部に移るから、代わりに入ってくれない？」（笑）って言われて生物部に入ったのがきっかけですね。そこでオサムシに出会ったんです。



もう、可愛くて
仕方がないですよ（笑）

牛の糞が入った飼育箱から
オオセンチコガネを探す
館野先生

堀田〉オサムシの美しさに惹かれた？

館野〉それもありますけど、オサムシは変異が多いんです。亜種というものがあったり、そういうところが面白いと思って。シズオカオサムシ、トサオサムシ、いろいろあって何が違うの？って。そっくりなのによく見ると違う。日本列島が繋がったり離れたり、東京湾が北に開いたり南に開いたり、寒冷期の影響とかそういうことで様々な分布の仕方をして、多くの変異が生じる。一つの生きものの姿に地理とか気候変動とかいろいろなものが詰まっている。そういうことに気付かされるきっかけがオサムシだったんですね。

堀田〉虫の絵は昔から描かれていたんですか？

館野〉描いてました。ただ、特に決心して描き始めたわけでもないんですよ。近所に細密画家の熊田千佳慕が住んでいて、うちの母が習っていたこともあって、私も熊田家に入出入りするようになった。虫を描くということが生まれ育った環境にあったんです。

堀田〉絵本を描くようになったのは？

オシマルリオサムシ



画像提供：館野 鴻氏

堀田〉一冊の絵本を作り上げるというのはそこまで消耗することなのですね。

命に向き合う

館野〉私は綺麗なオサムシがいっぱいいるから北海道の大学に行ったんですけど、ある時、オシマルリオサムシ、オシマキンオサムシっていう渡島半島にしかないオサムシを捕りに行ったんです。キラキラしたオサムシが106匹も捕れたんですけど、その山がいわくつきで、隠れキリシタンが処刑された場所なんですね。その歴史は何となく知っていたから、「そう言えば殺された隠れキリシタンって106人じゃなかったかな？」って気になってしまって、函館の教育委員会に聞いてみたんですよ。そしたら106人ですと。そこで初めて、それまで好き放題採集して、言ってみればぶっ殺してきた虫と、人の命が重なり合ったんです。急に恐ろしくなってきた、それ以後何年も虫を捕れなくなりました。今思えばあの時、「虫の命と人の命、何が違うんだ?!」そう衝撃を受けたことが絵本作家としての原点になっているのかもしれない。

堀田〉館野さんはどの昆虫を描いても底流では命のことを描いているように感じます。

館野〉ええ。でも本当のことを言うと、私の絵本に命は描いてありません。命はあくまでも「状態」であって、紙に定着させることなどできないんです。でも、もしかしたらページとページの間に、描くことが不可能



館野〉絵本を手掛けるようになるまでには紆余曲折がありました。現代美術に関わったり、芝居をやったり、ジャズミュージシャンを本気で目指した時期もあった。土木作業をしていた時期もありました。いろいろ迷った挙句に自分の原点に戻ってみようと思って改めて生物画に取り組んでみたんです。その後は、いろいろな縁のおかげで学研のイラストの仕事もらえることになった。ところが、写真技術の発達でイラストの必要性がなくなってきたんです。どんどん仕事が減ってきたんで、科学絵本のようなものを書いてみてはどうか？とまわりに言われて始めたのが最初です。家族もいるしこれでダメなら廃業だって思いながら描いたのが『しでむし』。全精力を使い果たしてしまったので、その後半年くらい精神病院に通いました。

な命のようなものが忍び込むことはあるのかもしれない。そう願いながら描いています。

堀田〉それが読む人の心に響くのかもかもしれません。今日はありがとうございました。

新作絵本を手に



以下の館野さんの絵本（絵のみ担当・文のみ担当も含む）は平岡幼稚園の職員室前の本棚にもあります。ぜひ皆さんも手に取ってみてください。

『あまがえるのかくれんぼ』世界文化社
『はっばのうえに』・『なりすますむしたち』福音館書店
『しでむし』・『ぎふちょう』・『つちはんみょう』偕成社
『宮沢賢治の鳥』岩崎書店

地域の自然を知ろう!守ろう!伝えよう!

平岡いきものはっけん隊 アクションレポート Action Report 2019.3月~5月

平岡幼稚園では「自然の中であそび、自然から学ぶ」をテーマに、園内外のさまざまな自然とふれあいを深めていく活動を行っております。多種多様な恵みをもたらしてくれる自然を、私たち1人ひとりが大切にしたい!と思うことが、地域の自然環境を守っていく第一歩となるはずです。

本コーナーは、我が園春季のアクションと地域の自然観察スポットの情報等を盛り込みました。皆様の自然体験の充実のお役に立てれば幸いです。

4/20、里山体験フィールド
(平塚市土屋)にて

A① 平塚環境パネル展

平成31年3月5日(火)~12日(火)に平塚市役所本庁舎1階多目的スペースで開催された“環境パネル展”に参加しました。平岡幼稚園「平岡いきものはっけん隊」の活動成果として、ビオトープの取り組みパネル、各種調査活動の報文、園の発行物(湘南自然誌・セミのぬけがら見分け方図鑑)を展示し、我が園の活動を市民の皆さまに向けて情報発信を行いました。

環境パネル展って?

平塚環境政策課が事務局となる“ひらつか環境ファンクラブ”が実施するイベントです。平塚市内で活動する団体・企業12団体が、環境問題について伝えたいことや日頃の活動成果などを、毎年3月にパネル展示しています。



平塚市役所 1Fにて展示

A② 第25回市民環境活動報告会

「環境活動 SDGs と共にグローバルに考え、地元から行動しよう!」をテーマに行われた第25回市民環境活動報告会が、平成31年3月2日(土)に神奈川県民センター2階大ホールで開催されました。平岡幼稚園「平岡いきものはっけん隊」は、ポスターセッションに参加し、我が園のビオトープの取り組みや湘南自然誌の活動などについて発表を行いました。県内で環境保全活動を実施している多くの皆様に、“園児が行う様々な環境保全のアプローチ”をアピールしました。

神奈川県民センター(横浜市)



環境問題の専門家等による講演



平岡ブースで活動アピール

市民環境活動報告会って?

神奈川県下で環境保全活動を実施している団体・個人の方々が集い、その成果を発表し合い、未来の自然環境保全に向けてさらなる飛躍に繋げることを目的としています。主催は、神奈川県環境学習リーダー会・かながわ環境カウンセラー協会・かながわ地球環境保全推進会議です。



わかば環境 ISO 証書授与式

我が園の環境教育の成果が認められ、平塚市長より“わかば環境 ISO 証書”をいただきました。平成 30 年度の我が園の報告書は、平塚市のホームページで公開されています。
(平塚市 HP) <http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/common/200041330.pdf>



園の体育室にて

5年連続でISO証書をいただきました！

わかば環境 ISO って？

平塚市が、市内の幼稚園・保育園・小学校・中学校を対象に、各学校で行われている環境にやさしい教育活動について認証を行うものです。環境にやさしい教育活動の方針を掲げ、それぞれの役割分担や取り組むメニュー等を決め、PDCAを実践し、自分と身近な人々、自分を取り巻く社会及び自然とのかかわりに関心をもち、環境の大切さを知るとともに自らの生活を振り返ることで、環境保全に対し前向きに取り組む態度を育むことを目指しています。



春の生きもの探し

平成 31 年 4 月 20 日(土)に里山体験フィールド(平塚市土屋地区)で、春の生きもの探しを実施しました。同地には、ほどよく維持管理された里山(樹林帯)と、豊富な湧き水がでる谷戸があり、たくさんの生きものたちが生息する場所です。ダビドサナエというこの辺りでは珍しいトンボも見つかりました。ダビドサナエは、平岡幼稚園らが行った調査によって金目川水系の広い範囲に幼虫が生息していることが明らかにされましたが、成虫の目撃例は少ない種類です。

その他、子ども達に人気のカブトムシ幼虫やコクワガタ、谷戸ではオニヤンマ幼虫なども見つかりました。子どもも大人も皆で生きものを探すことの楽しさを共有でき、楽しいひと時となりました。



オニヤンマ幼虫って、こんなところにいるんですね～！



アマガエル捕まえた！



テントウムシを触れるようになって嬉しかった！(園児)



ツチイナゴ

みんなを笑顔にしてくれるたくさんの生きものたち！



カブトムシの幼虫

カブトムシの幼虫を捕まられて嬉しかった(園児)



ダビドサナエ♀



クビキリギス



オニヤンマ幼虫



コクワガタ♀



虫に対する見方が変わって楽しかったです(園児母)

家の周りにいない虫がいっぱい見れました(園児母)

お問い合わせ

「里山をよみがえらせる会」
Mail : satoyama_tsuchiya@yahoo.co.jp
HP : <http://www.tsuchiyasatoyama.sakura.ne.jp/>



里山体験フィールドって？

産業廃棄物や残土で埋め尽くされていく谷戸、人がかかわらなくなった里山を、昔の姿によみがえらせ、里山で遊んだ子ども文化を残そうと、平成 12 年に「里山をよみがえらせる会」が土屋寺窪の山林を借り受け、里山の維持・管理作業を行っているフィールドです(私有地)。

平岡幼稚園では2015年より神奈川県内のハルゼミの生息状況調査を実施しており、これまで県内の104箇所まで調査を行ってきました。今年も真鶴半島の合同調査を皮切りに、有志によって県内21箇所の調査を行いました。今年の調査結果も、例年と同様、平塚市博物館研究報告「自然と文化」に投稿する予定です。

ハルゼミは、日当たりの良い樹冠や高所の枝先にいるため、なかなか成虫の姿を観察することが困難なセミですが、脱け殻を探したり、鳴き声（合唱）を聞いて、みんなで春～初夏の風物詩を楽しみました。

真鶴の合同調査では、調査の合間に三ツ石海岸に寄り道して磯遊びも盛り上がりましたので、そちらの写真も一緒にご紹介します。



ハルゼミのぬけがらは、意外と高いところに付いていることが多いです。



え？これがハルゼミのぬけがら？

ハルゼミのぬけがら発見！！

ぬけがらでオスとメスがわかるよ！



これはどっちだろう…

オス・メスの判別にも挑戦



途中から雨が降ってきたのが残念、もっと遊びたかったです！（園児父）

4/30 (土) の参加者の皆さん



ハルゼミの鳴き声が聞いて良かった！（園児）

5/3 (金) の参加者の皆さん



三ツ石海岸

磯は、色々な海の生きものが観察できます！



このカニかわいい〜♡

ウミウシがいっぱい！

魚 カニ、貝、イソギンチャク、色々見つかったね！

これは何とヒジキ！



ヤドカリが歩いてる！

ぼくもカニ捕まえた〜♪



ハルゼミ

ハルゼミって
どんなセミ？

ハルゼミは、本州に生息するセミ類の中で最も出現が早いセミで、神奈川県では4月下旬～5月下旬頃に出現し、マツ林で「ギーー、ギーー、ギーー」と鳴きます。
寄主植物がアカマツやクロマツに限定されるため、全国的に蔓延しているマツ枯れと共に県内各地で姿を消しています。

県レッドデータブックNO.006
要注意種